

「とっとり、ひとり」

奈良 敏行

(笈の定有)

「読書室」の三砂慶明さんからうれしい言葉をいただいた。
た。

《「音信不通」に寄稿されている、皆様の文章が次々に形
になっていくのを拝読していて驚くとともに、これもきつ
と、奈良さんの本屋の仕事なんだなと思ひ、感動しまし
た。》

二〇二〇年から二四年にかけて連載し続けた原稿を三
浦永理さんが単行本にしたのだ。

タイトルは『とっとり、ひとり』、刊行のきっかけは二
つ。一つは今年の「文学フリマ」に出品参加。もう一つは
二十代の区切りを記念するためだ。三砂さんにお願ひして
「読書室」でも販売してもらえらることとなった。きつと三
砂さんなら、定有堂―「読む会」―「音信不通」の連なり
にこの本を紐付けてくれると思うからだ。

わたしはかつて定有堂書店の店内で三浦さんに言った
らしい。

《人生、二十八歳くらいで変わる人が多いですよね》

これはわたし自信が信じた生成変化の入口であり、その
後度々人にも言いつづけた「気づき」だ。パスカルの「パ
ンセ」は告げている。

《齡が若すぎると正しい判断ができない。齡をとりすぎて
いても同じだ。》

パスカルは特にその時期を語ってはいないが、わたしは
三十歳手前がそんな時で、生成変化のチャンスだと考え
る。

この『とっとり、ひとり』は三浦さんが『音信不通』に
五年書き続けてきた果てにやって来た覚醒の書だ。三浦さ
んの覚醒とは何だったのだろうか。この本は「私自身の人生
と地続きである」と最初に宣言する。

《私は物語ることの力を信じている。けれども、私は物語
ることに挫折した。》

《私は、もう自分と地続きの文章しか書くことはできな
い》

三浦さんは才能豊かな人だ。でもその才能を閉塞させる
何かがある。東京で働いていたのだが、資格を取り直して、
縁もゆかりもない鳥取へ移住してきた。大きな物語から逃

れるためだったと言う。

《知らず知らずのうちに私は、「震災」という大きな物語を通して人生を、自分のアイデンティティを捉えてしまおう。》

自分は自分から語り始めたい。しかし人は震災と同時代に生きるその現実から問い始める。私はそこにいないという心の叫びが、私を閉塞する。

三浦さんの鳥取は、定有堂書店の発見から始まった。就職の面接で訪れた時、様々な不安があった。しかし、通りの中に偶然、定有堂書店を見つけたとき、「私、ここに住めるかもしれない」ところに灯がともった。

本に出会い、人に出会い、岩田直樹さんが指導する定有堂教室の熱心な参加者となった。「読む会」「ドウルーズを読む会」そして三砂慶明さんとの出会いをきっかけに始まった小説を読む「読書室ビオトープ」の三つのすべてに出席している。

三浦さんはある人に言われたことがある。

《やりたいことがいっぱいあって、それができないから辛いんですね》

才能があり感性が豊かな人は惑わされる。『音信不通』に書き続けることによって、できること、できないこと、できなくてもいいことが明らかにになった。そこが出口だ

が、それは「自分と地続きの文章」を書き続けなければならないという発見と覚醒だった。『音信不通』の入口だから「縮減」はいずれやってくる彼岸であった。「パンセ」にこんな言葉もある。

《本を読むのが速すぎても遅すぎても、何も理解できない。》

三浦さんは本を買いすぎる人だった。定有堂書店がなくなってよかったのかもしれない。読書は気がつけば大きな物語へ人を誘うからだ。

三浦さんは覚醒する。

《私は自分の意志を見失ったわけではなくて、それにことばを与える余裕がなくなっただけだ。》

本や物語に依存することは、話しことばに拘束される世界だ。本屋からも人からも遠く離れて、三浦さんは書きことばの世界へと分け入っていく。この『とつとり、ひとり』の出口に立って、三浦さんは「私にとって、この『音信不通』の場合は、書き言葉の場である」と覚醒する。

この本の冒頭には、三浦さんの心を慰めた鳥取の風景写真がちりばめられている。砂丘、袋川の土手、湖のカフェ、そして定有堂の夜景。

三浦さんはこの本は自分の一区切りだから、そんなにたぐさんは造っていない、ひと渡り届けるべきところに届

けばそれで終わりだと考えている。でもわたしは読後、「終わった話でなく、これから出会う一〇〇人のために、急がないで売り切らないで、一〇〇冊残した方がいいですよ」と告げた。


2025. 01. 14

(参考)

三浦永理 『とっとり、ひとり』 2025. 01. 13

山下浩嗣 『パスカル『パンセ』を楽しむ』 講談社学術

文庫 2016



笈の定有